

帰国報告書

モスクワ市立大学
Московский Городской Университет
(2018年9月～2019年6月)

大政 美南



1. 年間業務日程

2018年	8月末	着任、講師会
	9月3日	前期授業開始 (3.1.1 参照)
	10月7日	モスクワ市弁論大会
	10月27日	モスクワ国際学生日本語弁論大会
	11月10日	カザン連邦大学弁論大会 (4. 参照)
	12月末	前期授業終了、ザチョット
2019年	1月中旬	試験期間、成績提出
	2月4日	後期授業開始 (3.1.2 参照)
	2月15日	モスクワ市立大学日本語オリンピック最終選考 (4. 参照)
	3月21日、22日	国際教育会議
	3月23日	オープンキャンパス (5. 参照)
	4月8日～19日	桜の週イベント (4. 参照)
	4月10日～13日	International Education Fair (5. 参照)
	4月13日	沿ヴォルガ日本語弁論大会 (4. 参照)
	5月17日	リヤザン国立大学弁論大会 (4. 参照)
	5月18日	モスクワ市立大学弁論大会 (3.2.1 参照)
	6月初旬	後期授業終了、ザチョット
	6月中旬	試験期間、成績提出
	6月末	帰国

2. 赴任校の概要

2.1 大学の概要

大学名	モスクワ市立大学 露) Московский Городской Университет 英) Moscow City University ※略称は МГПУ
学長名	レモレンコ イーゴリ ミハイロビッチ 露) Реморенко Игорь Михайлович 英) Remorenko Igor Mikhailovich
所在地	露) 105064 г. Москва, Малый Казенный пер., д. 5 Б 英) 5B Malyy Kazennyj pereulok, Moscow, 105064
連絡先	+7(495)607-16-02
国際部	+7(495)607-14-36

2.2 学部の概要

モスクワ市立大学には 12 の学部 (Институт/Institute) があり、日本語は外国語学部 (Институт иностранных языков/Institute of Foreign Languages) で教えられている。外国語学

部には 13 の専攻がある。そのうち、日本語の授業があるのは、通訳翻訳専攻（Перевод и переводоведение/Translation Studies）と東洋学専攻（Языки и культуры стран азии и африки/Asian Language and Literature）である。通訳翻訳専攻は、4 年間を通して日本語訳者に必要な語学力、知識を養成し、卒業生は言語学学士号を取得する。東洋学専攻では、日本語コースと中国語コースに分かれているが、2 年次に日本語コースは中国語を、中国語コースは日本語を学習する。語学のほかに、アジアの歴史、地理、経済など幅広い知識を身に付け、卒業生は東洋学学士号を取得する。以下に日本語コースの詳細をまとめる（表 1）。日本語を学んでいる学生に関する詳細は表 2 に記す。

表 1 日本語コースの詳細

責任者	学科長（Заведующий кафедрой /Head of Japanese Language Department） フェジャーニナ ヴラドレーナ アナトリーエブナ 露）Федянина Владлена Анатольевна 英）Fedyanina Vladlena Anatolyevna
電話番号	+7(495)607-51-30
設置年	2007 年
教師数	日本語のカフェドラ所属 30 名（日本語教師 18 名 内、日本人 4 名）
専攻	通訳翻訳専攻（言語学）露）Перевод и переводоведение 英）Translation Studies 東洋学専攻（東洋学）露）Языки и культуры стран азии и африки 英）Asian Language and Literature
日本語履修 学生数	全体 219 名（通訳翻訳専攻 98 名、東洋学専攻 121 名）※詳細は表 2
卒業後の進路	学校（школа）の教師、大学の日本語教師、語学学校の日本語教師、国際交流基金事務所、大学院進学 など

表 2 日本語履修学生の詳細

学年	専攻名	人数	日本語のレベル
1 年生	通訳翻訳	32 名（3 クラス）	N5～N4
	東洋学	57 名（5 クラス）	
2 年生	通訳翻訳	25 名（2 クラス）	N4～N3
	東洋学	31 名（3 クラス）	
3 年生	通訳翻訳	26 名（3 クラス）	N3～N2
	東洋学	19 名（2 クラス）	
4 年生	通訳翻訳	15 名（2 クラス）	N2～N1

	東洋学	14名(2クラス)	
--	-----	-----------	--

(人数は2018年度開始時のデータ)

表2の通り、学生数は年々増加している。その理由として、次の3点が考えられる。まず、大学の入学制度の変更により、受け入れ人数が増加したことである。この理由により、2019年度日本語履修学生数は更に増加する見込みである。それに反し、退学者が多く年々学生数が減っていくことも、1年生が多く4年生が少ない理由であろう。4年間日本語を専攻し、学び続けることに難しさを感じる学生も少なくなく、そういった学生は同学部内の他専攻に移ったり、他大学に編入したりしている。最後に、日本語人気が理由としてあげられるだろう。報告者が学生に調査したところ、日本文化への興味、音楽やアニメなどの現代文化への関心、日本語そのものへの興味などが入学志望理由としてあがった。卒業後の進路希望は、日本の企業、ロシアの学校の教師、日本語教師、研究者、通訳者、翻訳者など日本関係の職業がほとんどである。報告者の担当した学生は表2の網掛け部分で、115名である。

3. 報告者の日本語教育業務

3.1 担当授業

報告者は、前期は1年生の発音指導(Практическая фонетика японского языка)と、通訳翻訳専攻3年生の音声学(Теоретическая фонетика)を担当した。前期は週に12~13コマ担当していた。後期の担当授業は、1年生の発音指導(Практическая фонетика японского языка)である。後期は週に8コマ担当していた。以下に授業ごとの詳細を記す。

3.1.1 前期担当授業

1) 通訳翻訳専攻1年生 発音指導(Практическая фонетика японского языка)

(90分×2コマ/週)

概要:1年生が履修する日本語の授業は、ロシア人教師が担当する「総合日本語」と、当授業である。総合日本語を担当したロシア人教師と授業内で扱った語彙や文型を共有し、当授業でそれらの発音指導及び、会話練習を行った。

主教材:なし

副教材:『5分でできる にほんご音の聞きわけトレーニング』(スリーエーネットワーク)

『1日10分の発音練習』(くろしお出版)

評価方法:授業成績70%、試験成績30%を合計し、5段階で評価した。授業の成績は出席30%、平常点30%、宿題10%、小テスト30%で構成される。授業の成績が良い学生は、試験を免除した。

活動:ひらがな、カタカナも勉強していない学生に発音を指導するということで、まずは単音の発音指導から入った。そのため、授業をしながら、学生の発音上の問題点を見つけ、授業の練習に取り入れるという形をとった。日本語に慣れることが第一の目標であるため、直接的には発音に関係

のないタスクなども取り入れた。単音の聞き取りと発音、特殊拍の聞き取りと発音、新出語彙のアクセントの聞き取りと産出、日本語のヤマ（プロソディ）の聞き取りと産出、既習文型を使った文の発音練習、イントネーション、アクセントのルール、会話練習等を授業内で扱った。

所見：ゼロレベルの学生に、発音指導のみの授業を週に2回実施するのは、計画・実行ともに苦労が多かった。特に、問題点を事前に洗い出すことができず、授業中に見いだされた課題を次回以降の授業で取り扱うという場当たりの内容になってしまった。日本語に慣れるという目標は達成されたと思うが、体系的な指導の重要性を感じる。前期の授業を通して、ロシア語話者特有の課題や、授業の方向性が見えてきたので、後期以降に生かすことができるだろうという感触を得た。

2) 東洋学専攻1年生 発音指導 (Практическая фонетика японского языка)

(90分×1コマ/週)

※概要、教材、活動は上記1)と同じである。

評価方法：授業成績（出席率40%、平常点40%、小テスト20%）のみで評価し、51点以上の学生はザチョット（合格）とした。

所見：東洋学専攻の学生は、週に1回のみであった。通訳翻訳専攻に比べ、日本語に慣れるまでには至らなかった。アクセントやイントネーションの基本は身についたものの、日本語のヤマの問題が残った。日本語の文を1文読むのに、苦労している学生が見られた。週1回の授業内の練習だけでは不十分であり、学生の自律学習の重要性が分かった。

3) 通訳翻訳専攻3年生 音声学 (Теоретическая фонетика)

(90分×1コマ/隔週)

概要：日本語音声学ではなく、音声学全般について学ぶ授業である。ロシアの伝統的な授業形態に従い、講義とセミナー形式で進んだ。音声学自体の授業は毎週あり、交互に講義とセミナーがある。講義で音声学について学び、セミナーで発表、ディスカッションを行う。講義はロシア語の堪能な日本人教師が担当し、セミナーを報告者が担当した。

教材：なし

評価：出席率60%以上で、セミナーで2回以上発表した者にはザチョットを与える。

活動：講義で音素、イントネーション、アクセントなど音声学の基本について学んだことに加え、学生が文献で調べた情報をもとに、プレゼンテーションを行わせた。発表する学生には、ディスカッションポイントを提示させ、クラス内で話し合った。その後、扱われたテーマに関して、報告者が質問し、ディスカッションを行った。

所見：音声学の内容を日本語で発表するという点で、学生にとっては非常に負担の大きい授業であったと思われるが、非常に意欲的に取り組み、ディスカッションも様々な議題に発展していった。3年生になると、学習言語能力を身に付けるに至っている学生も多いことが分かった。

3.1.2 後期担当授業

1) 通訳翻訳専攻1年生 発音指導 (Практическая фонетика японского языка)

(90分×1コマ/週)

概要：前期に引き続き、発音指導を担当した。後期は週1回に減ったので、単音発音、アクセントなどの発音指導により焦点を当てた。週1回では不十分であるので、自律学習の重要性を説明したうえで、宿題や課題を課し、小テストで到達度を逐次示すようにした。

主教材：なし

副教材：『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』(スリーエーネットワーク)

『毎日練習！リズムで身につく日本語の発音』(スリーエーネットワーク)

『Shadowing 日本語を話そう！』(くろしお出版)

評価方法：授業成績70%、試験成績30%を合計し、5段階で評価した。授業の成績は出席30%、宿題・課題20%、小テスト30%、授業態度20%で構成される。授業の成績が良い学生は、試験を免除した。

活動：初回にガイダンスを行い、自宅学習の重要性を説明した。また、発音チェックを初回と最終回に行い、上達したポイントと、更に練習が必要なポイントを各自カルテのような形で手渡した。授業内の具体的な活動は、学生の中に日本語の発音の相対的な基準を設定してもらうことを目標に行った。練習にアクセント、拍感覚、イントネーション、ヤマを複合的に取り入れ、感覚を磨いてもらった。学生同士でお互いの発音を確認する活動や、クラス全体で文のプロソディを考える活動を行うなど、必ずしも教師が正解を提示しない活動を心掛けた。

所見：上記であげた学生同士で発音を確認したり、話し合ったりする活動は、学生の意識が発音に向き、どういった点が問題かを明確に理解させる効果があったと感じている。このような活動は、モデル音声があればよく、非母語話者教師でもできるのではないかと考えている。会話の中で適切なイントネーションで産出する練習も行ったが、相手を不快にするイントネーションで産出してしまふという問題が残っている。今後は、会話練習を積極的に取り入れ、この点にも更に焦点を当てていきたい。

2) 東洋学専攻1年生 発音指導 (Практическая фонетика японского языка)

(90分×1コマ/週)

※概要、教材、活動は1)と同じである。

評価方法：授業成績 70%（出席 30%、宿題・課題 20%、小テスト 30%、授業態度 20%）とザチャット 30%の合計で評価し、51点以上の学生はザチャットとした。

所見：概ね1）と同様である。東洋学の学生は日本語の授業総数が減ったものの、自らの発音の問題を自覚し、練習に取り組み、授業後も質問に来ていた。クラス全体の雰囲気、個人の学習態度に及ぼす影響は大きく、その点では、東洋学はクラスみんなで課題に取り組む態度を培うことができていると感じた。また、このような態度を週1回のみ担当する報告者が培うのは難しく、担当する現地教師に依るところが大きい。

3.2 授業外の日本語教育業務

3.2.1 第1回モスクワ市立大学弁論大会実施

概要：2019年5月18日に第1回モスクワ市立大学弁論大会が行われた。これまで、モスクワ市の弁論大会に出場する学生は、教師の指名で決められていた。そのため、本当に出たい学生が出ることができないという状況が続いていた。そこで、2年前よりモスクワ市立大学で指導しているロシア人教師の発案のもと、開催が決まった。発案者のロシア人教師と日本人教師4人が運営委員となり、原稿の確認、質問の作成、審査が行われた。

所見：開催が急に決まったため、運営側も学生側も準備不足は否定できない。出場者は多くないと思われたが、自主的に1年生から3年生の15名が出場を決めた。出場者は準備時間が限られていたものの、しっかりと原稿を作り、発表できていた。来年度以降の課題としては、次のようなものがあげられる。まず、学園祭のような位置づけである「桜の週」に併せて行うなど、運営側の準備を緻密に行うことである。そして、弁論は各言語、各文化特有の特徴があると思われるが、原稿を作る以前から、原稿を作るにあたってのサポートが求められるということである。最後に、モスクワ市の弁論大会出場者を決めるだけでなく、学生が意見を言う場、お互いの意見を理解する場として、教育上の役割を確立し、学生に運営に携わってもらうということである。いずれにせよ、第一歩が踏み出せたことは非常に大きな歩みだと感じている。

3.2.2 1年生合同授業の実施

同僚のロシア人教師と協働し、1年生の合同授業を計3回行った。1回目は指示詞について、2回目は日ごろの疑問について、3回目は書道の実施である。1回目、2回目は、授業を行うというより、学生が質問し、ディスカッションを行って進行した。ロシア語と日本語で行われたため、ロシア人教師が普段の授業で説明しきれないこと、日本語の問題で学生が報告者に質問できないこと、報告者が限られた日本語で説明しきれないことを扱ういい機会だったと思う。

3.3 日本語指導における反省点と今後の課題

1年を通して、発音と音声に携わらせていただいた。発音指導のみの授業を担当したことはなく、音声学も専門外で最初は非常に戸惑った。派遣前研修で発音指導に関する講義があったのが救いであった。赴任後、同僚の先生方への聞きとりや、文献からの情報をもとに授業を行ったもの

の、ロシア語話者特有の発音上の問題点をつかみきれず、解決すべき課題を設定できないまま授業を行うことになってしまった。その結果、場当たりの指導になってしまったことは否めず、もっと効果のある授業計画が後期の大きな課題となった。

後期は、前期の授業から見いだされた課題をもとに、授業を組むことができた。後期は発音チェックなども行い、更に学生の抱える課題を明確にすることができたので、今後は更に体系的なシラバスを組むことができると思われる。

また、発音練習のリソースが不足しており、学生が使用する教科書に、発音に関する誤った記載があるなどの問題がある。そこで、WEB上で発音に関するページを作成し、そこで情報提供、自律学習のサポートを行うことを考えている。更に、担当外の学生でも自由に会話をしたり、質問したりできるオフィスアワーの設定を計画している。

上記のように、初めて担当する発音指導の授業準備に時間がかかり、特に前期はそれ以外の青年交流などの活動が十分にできなかった。

4. その他の業務

1) カザン連邦大学弁論大会審査員

2) 沿ヴォルガ日本語弁論大会審査員

3) リャザン国立大学弁論大会審査員

…各大学・各運営委員の審査基準に則って、審査を行った。

4) モスクワ市立大学日本語オリンピアド審査員

…日本語のあらゆる力を試す大会で、上位の学生がモスクワ市立大学に入学した場合は、授業は無料で受けられ、奨学金も支給されるという大会である。最終試験が会話の試験で、報告者は審査員として参加した。ロシア中の生徒が参加した。N2レベルの学生も数人おり、ロシアの中等教育における日本語教育の広がりを実感した。

5) 桜の週の自己紹介コンテストの審査員

…毎年行われる日本語履修生のための学園祭のようなもので、さまざまなイベントが行われる。その中に、「記憶に残る自己紹介コンテスト」があり、報告者は審査員として参加した。

6) モスクワ市弁論大会出場者の指導

…モスクワ市の弁論大会に出場する学生の原稿を添削し、発音指導、質問に答える練習などを行った。しかし、残念ながら、報告者が担当した学生は体調不良のため、当日出場辞退した。

7) 日本語・日本文化研修留学生に応募する学生のための推薦状作成

…研修生として留学を希望する学生の依頼を受け、推薦状を作成した。

8) 日露学生交流に参加する学生の手配

…J-FESTに招待された日本グループと交流・案内する学生を募集し、関係機関と連絡を取り合った。

5. 青年交流

1) オープンキャンパスに参加

…3月23日にオープンキャンパスが開催され、主に来年度入学を希望している生徒と、その両親が大学に訪れた。学生たちがマスタークラスを開催し、先生方が大学や授業に関する質問に答えるという形である。日本語を勉強している生徒、日本に興味がある生徒が数多く訪れた。報告者の役割は、そういった生徒の話し相手になることであった。

2) チリ・サンチアゴ大学の日本語履修学生との交流

…報告者の知人が、チリ・サンチアゴ大学で日本語教師をしているため、インターネット上でそちらの学生と交流を行った。具体的には年末年始の文化紹介である。

3) International Education Fair におけるマスタークラス開催

…ロシアだけでなく、世界中の教育機関が集い、アピールする International Education Fair があり、報告者も参加した。訪問者の話し相手になったり、訪問者の名前を墨で書いたりといった活動を行った。非常に好評であった。

4) モスクワ市内の日本人とロシア人の会話クラブに参加

5) JF 講座のビジターセッションに参加

…大学外の日本語学習者の実態を知りたく、会話クラブとビジターセッションに参加させていだいた。

6. 任地の生活事情

6.1 ライフライン供給状況

水 : 問題点は特にない。水が止まったことが一度あるが、数時間で復旧した。水はろ過し、煮沸すれば、水道水も飲むことができる。

温水 : 安定して温水が出る。夏になると設備チェックのために、モスクワ市内で順次温水が止まるらしい。

電気 : 電気の供給が安定していないのか、天井の電球が爆発することが何度かあった。インターネットは比較的安定している。

6.2 衣・食・住

衣 : 日本と変わらない。何でも手に入る。皆、身だしなみには気を使っているのので、正当な扱いを受けるためには、外国人もそういったコードに合わせるほうが良いと思われる。

食 : 東京の生活と変わらない。手に入らないものはない。日本食のレストランもあるし、日本食材もスーパーで売られている。物価は日本とあまり変わらない。

住 : 住まいは大学の寮である。教師のフロアに他学部のロシア人教師と住んでいる。風呂・トイレは2部屋で共用、キッチン・洗濯機は6部屋で共用である。一般的な大学の寮である。寮はセ

ントラルヒーティングであるが、送風口が少ないのか、窓が一重だからかは不明だが、冬になると室内は寒い。

6.3 交通の便

モスクワ市内ならば自家用車はいらないほど、交通の便は発達している。モスクワの地下鉄は現在も拡張を続けており、現在 15 路線が張り巡らされている。バスやトラム、トロリーバスの路線も充実している。モスクワ市内中心部ではレンタルの自転車やキックスクーターがあり、モスクワっ子はよく利用している。大きな問題は混雑である。ラッシュ時は東京と同じぐらい混む。交通機関内のマナーは良い。

6.4 治安

治安は良い。7年前にもモスクワに滞在したことがあるが、そのころに比べ、街の様子も明るくなり、治安の良さを感じる。ロシア人の知り合いから、酔っ払いが多いエリア、大きな駅の集まるエリアは気をつけた方がいいと言われたが、そういった地域を避け、節度ある行動を心がければ大きな問題はないと思われる。モスクワには東洋人と似た容姿を持つロシア人も多く、外国人だから目立って狙われるということはない。

7. その他（モスクワにおける日露派遣教師の役割の考察と今後の展望）

海外に派遣され、日本語教育を行うと聞くと、日本人がイニシアチブをとり、日本文化紹介を行ったり、体験クラスを開催したり、ということをお願いされるかもしれない。報告者もそういった意識を持っていた。しかし、実際に着任し、業務を開始すると、モスクワではそういった時代は終わったことを痛感した。大学の先生方は、日本の専門家で、日本人がいなくても問題なく業務を行い、学生たちに文化体験の機会を提供している。モスクワでは、大学外で本物の日本文化に触れる機会に恵まれており、学生もその機会を逃さず、貪欲に学んでいる。そんな中で、自身がイニシアチブをとり、自分の思い描いていたことを実施するのは、自己満足に過ぎないことを思い知った。

では、モスクワで何ができるのだろうか。10 か月の活動を通して見えてきたことは、影となって現地教師と協働することと、替えのきく存在たるということである。主役は私ではなく、学生と今後もロシアで日本語教育を続けていかれる現地教師の方々である。また、任期は長くても 3 年である。赴任者が変わるたびに活動が変わってもいいのだろうかと感じた。そこで、まずは学校側、現地教師が求めていることをしっかりと認識することが重要だと思われる。そして、替えのきく存在たれというのは、自分の活動が前任者、後任者、そして現地教師の作る歴史の中にあるということである。この意識のもとに、報告者が取り組んでいることは、目の前の業務に真摯に取り組むことはもちろん、現地教師のニーズに耳を傾けることだ。また、現地教師が行える発音指導についても、日々の授業を通して思案している。報告者の任期が終わった後も、現地の日本語教育は続いて行く。未来への貢献も考えて活動を行っていきたいと考えている。

8. 終わりに

モスクワ市立大学のフェジャーニナ学科長をはじめ、同僚の先生方、書記の学生がサポートをしてくださいました。学科長は不便がないか常に気を配ってくださいましたし、同僚の先生方は、生

活面・授業面で困ったことがあれば、相談に乗ってくださり、助けてくださいました。また、寮の問題は寮の管理人の方たちが迅速に対処してくださり、快適な生活が送れております。ビザや大学の雇用上の問題などは、大使館の方々が対応してくださり、無事に1年目の任期を終えることができました。ほかの任地の日露派遣教師とは弁論大会等で会う機会があり、その度にいろいろなヒントをいただきました。そして、やはり、1年の任期を無事に終えることができたのは、日露青年交流センターの皆様のおかげであると思います。このように、多くの方に支えられて、業務に取り組むことができたことは、感謝の念に堪えません。皆様に厚くお礼申し上げます。

